

A年特定13 マタイ14章13―21節

【直訳】

- 13 だが聞いて
イエスは 退いた そこから 舟で 人のいない場所に向けて 独りで
そして 聞いて
群衆は ついて行った 彼に 徒歩で 町々から。
14 そして 出て
彼は見た 多くの 群衆を
そして 彼は憐れんだ 彼らのゆえに
そして 彼は癒した 病人たちを 彼らの。
15 だが夕方に なって
近づいた 彼に 弟子たちが 言いつつ、
「人のいないところで ある この場所は
そして 時間は すでに 過ぎた。
去らせてください 群衆を、
ようにと 立ち去って 村々に向けて 彼らが買う 自分で 食物を」。
16 だが「イエスは」 言った 彼らに、
「ない 必要を 彼らは持つ 立ち去ることの、
与えなさい 彼らに あなたがたが 食べることを」。
17 だが彼らは 言う 彼に、
「ない 私たちは持つ 二匹に
以外には 五つの パン そして 二匹の 魚」。
18 だが彼は 言った、
「持って来なさい 私に ここに それらを」。
19 そして 命じて 群衆が 席に着くことを 草の上に、
取って 五つの パンを そして 二匹の 魚を、
見上げて 天に向けて 彼は祝福した
そして 裂いて 彼は与えた 弟子たちに パンを、
だが弟子たちは 群衆に。
20 そして 食べた 全員が そして 満腹した、
そして 彼らは取った あふれているものを かけらの
十二の 籠を 一杯のものを。
21 だが食べる者は あった 男たちで およそ 五千の
ほかに 女たちの そして 子どもたちの。

〔新共同訳〕

13 イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。14 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。15 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買って行くでしょう。」16 イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」17 弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」18 イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、19 群衆には草の上に乗るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。20 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。21 食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった。

①構成

①a 第一段落

13—14節は、五千人に食べ物を与えるという出来事の背景を述べている。並行箇所マルコ6章30—34節では、派遣された使徒の帰還がまず述べられる。マルコでは、食事をする暇もないことを心配したイエスが、弟子に「人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と指示する。マルコでは人里離れた所へ弟子も一緒に向かうが、マタイでは弟子の存在は言及されず、弟子は15節から登場する。従って、イエスが人里離れた所に退く理由もマルコとは異なっている。

①b 第二段落

15—18節は、イエスと弟子の会話である。「人のいない場所」に自分たちがいることを心配した弟子が口火を切る。弟子は「群衆が村へ立ち去って、自分で食物を買うこと」を提案する。イエスも群衆に食物が必要であることは認めている。しかし、イエスは弟子とは異なり、「群衆が立ち去る必要はなく、あなたがたが食べることを与えなさい」と弟子に命じる(15—16節)。すると弟子は、「ここに」は五つのパンと二匹の魚しかないことを説明する。弟子は食物を調達できるのは「村」であり、「ここ」ではないと考えているからである。しかし、イエスはそのパンと魚を「私に、ここに持って来なさい」と命じる(17—18節)。

①c 第三段落

19—21節はイエスの行った業(19節)とその結果(20—21節)を述べている。19節を並行箇所のマルコと比べると二つの相違がある。

① 第一にマルコでは、草の上に乗るようにという指示は弟子を通して間接的に行われているが、マタイではイエスが直接、群衆に「命じて」いる。

② 第二にマルコでは、その指示を群衆が実行したことが述べられているが、マタイはそれを省いている。その結果、マタイでは「命じて」↓「取って」↓「見上げて」↓「彼は祝福した」↓「裂いて」↓「彼は与えた」がひとつつながりになる。

イエスの動作を表すこれらの動詞のうち、「彼は祝福した」と「彼は与えた」以外は分詞形である。従って、強調点は「祝福した」と「与えた」にある。マタイが二つの変更を加えた狙いは、イエスに焦点を合わせることにある。

②ひとり人里離れた所へ (13―14節)

Ⓐ 13節冒頭に「聞いて」とある。イエスは洗礼者ヨハネの首がはねられたことを「聞いて」退く。「退いた」は単数形であるので、主語はイエスだけで、弟子は含まれていない。15節から見ると、弟子もイエスに随行したと考えられるが、そのことには何も触れず、マタイはイエスにだけ焦点を合わせている。

Ⓑ 「そこから舟で」。「そこ」がどこを指すのかははっきりと述べられていない。13章53―58節との関連で見れば、イエスを受け入れなかった故郷のナザレとも考えられるが、「舟で」去ることのできる場所であるから、ガリラヤ湖畔の町、カファルナウムも考えられる。

Ⓒ 「人里離れた・人のいない」を意味する形容詞は、名詞として用いられると「荒れ野」を意味する。「荒れ野」はイエスが宣教を始める前、悪魔の試みを受けた場所である(マタ四1―11)。並行箇所マルコでは、「人里離れた所」は、宣教から戻った使徒たちが「休む」場所として選ばれている(六31)。マタイでは、イエスは洗礼者ヨハネの首をヘロデがはねたと聞いて、人里離れた所に退く。

Ⓓ ヨハネはイエスと同様に、「回心しなさい。なぜなら天の国は近づいた」と述べて、宣教活動を行っていた(三2)。マタイでは、ヨハネは天の国の宣教をイエスと共に行う仲間と捉えられている。もちろん二人には相違もあり、ヨハネは牢の中から「来るべき方は、あなたでしようか」と弟子に尋ねさせている(一一3)。ヨハネはイエスの使命を悪の撲滅と考えていたから、「徴税人や罪人」との交わりを深めるイエスに疑問を抱いたのだろう。しかし、イエスは群衆に、ヨハネは「預言者以上の者」と告げている(一一9)。天の国の宣教を共に担うヨハネの死を知らされたイエスは、自分の死を予感したのかもしれない。宣教を開始する前、荒れ野で神への信仰を確認した時のように、イエスは「ひとり人里離れた所」に退く。

Ⓔ 「群衆はついて行った」。「ついて行く」と直訳した語は、弟子が師に「従う」という意味でも用いられる。ここは文字どおりに、イエスの「後をついて行く」の意味だが、イエスを受け入れなかったナザレの人々と対比されている。群衆は「徒歩で」イエスの後を追うが、彼らの中には病人も含まれている。イエスを思う熱意が、彼らにイエスの後を追わせている。

Ⓕ イエスは大勢の群衆を「見た、そして憐れんだ」。マタイ9章36節では、羊飼いのいない羊のよきな群衆を「見て、憐れんだ」イエスは、十二人を宣教へと派遣する。マタイ20章34節では、イエスは「憐れんで」、目の不自由な人の目に触れ、癒す。14章14節でも、イエスは「見て憐れみ、彼らの病人たちを癒した」とあるが、並行箇所マルコ6章34節では、イエスは「見た、そして憐れんだ、そして教え始めた」と述べられている。マルコでは「教える」という語が用いられているが、マタイでは、憐れむイエスは「病人を癒す」。マタイは、憐れむことと奇跡とを結びつけていると言えるだろう。それゆえ、15節以下で、イエスは食物を与えるという奇跡を起こして、群衆を養う。

③ 「私に、ここに」持って来なさい (15―18節)

① 「五千人に食べ物を与える」という奇跡物語は四福音書すべてが伝えている (マコ六30―44、ルカ九10―17、ヨハ六1―14)。しかし、この奇跡が起きた場面を「夕方」とするのはマタイだけである。マルコ6章35節は「時もだいたいだったので」、ルカ9章12節は「日が傾きかけたので」と述べているが、ヨハネ6章1節以下には時間を表す描写はない。ルカを除く三つの福音書は、この後に、イエスが「湖の上を歩く」という奇跡を述べているが、それは三つとも、「夕方」の描写で始まっている (マタ一四23、マコ六47、ヨハ六16)。イエスが群衆をパンで養ったのは「夕方」であったとマタイが明記するのは、この奇跡を「主の晩餐」に結び付けるためである (マタ二六20)。

② マタイはパンで群衆を養うイエスに、「主の晩餐」のイエスを見ている。「立ち去る必要はない」というイエスの言葉は、「主の晩餐」への間接的な招きとなっている。弟子の役目は、「主」のもとはない別の場所へと群衆を立ち去らせるのではなく、「主の晩餐」のパンを群衆に分け与えることである。

③ 弟子は自分たちが持っているのは「五つのパンと二匹の魚」であると言う。魚は塩漬けされたものや干物であり、それをパンに挟んで食べた。パンに関する奇跡は、列王記下4章42―44節の預言者エリシャの物語や詩編23の民を養う羊飼いを思い起こさせる。

④ イエスは「それらを私に、ここに持って来なさい」と命じる。「私に、ここに」とあるように、パンと魚はイエスのもとに運ばれる。イエスは食卓で家族に食物を分ける主人のように振る舞う。他の並行箇所にはこの命令はない。

⑤ 弟子とイエスは「ここから立ち去る」必要があるかないかで対立している。並行箇所のマルコには「ここに」という語は含まれていないが、マタイは「ここに」を繰り返す。しかも、「ここ」とは「私(イエス)」のいる場所である。マタイのイエスは、「ここ」が食物の与えられる場所と考えている。

④ パンを裂いて与える (19―21節)

① 「取って、彼は祝福した、裂いて、彼は与えた」。この一連の動作はユダヤ人の食事に普通に見られる (使二七35)。しかし、この動作は同じ順序で、マタイ26章26節の主の晩餐の聖体制定の場面にも現れる。

② マタイは「命じて」から「彼は与えた」まで、イエスの動作を中断のない、一連の動作として描くことによってイエスの姿に焦点を合わせていく。イエスへの集中は13節にも見られたが、16節にも少しばかり形を変えて現れる。16節の「彼らは立ち去る必要はない」はマタイの挿入であって、マルコにはない。マタイはこの句を挿入することによって、「ここ」がどういう場所であるかを教えている。イエスのいる「ここ」は食物の出所となる。だから、「立ち去る必要はない」のである。

③ マタイはこのように細かな変更を加え、イエスに焦点を絞る。こうして、「主の晩餐」のイエスとの関連性を暗示する。19節後半では「魚」には何も触れず、「パン」だけが裂かれて与えられる。これは、「主の晩餐」で魚が振る舞われなかったことと無関係ではない。マタイはパンを振る舞うイエスの姿に、いのちの糧を与える「主の晩餐」のイエスを重ねている。

④ 「全員が食べて満腹した」あとに、パンのかけらは「十二の籠」一杯にあふれた。「十二」という数はイスラエルの十二部族に対応しているが、ここではイエスによって生まれた新しい民を指す。他の並行箇所は「女と子ども」には触れていないが、「男と女と子ども」にマタイは言及する。マタイは群衆の多さだけでなく、イエスのもとに集まる家族全員が養われたことを暗示する。

⑤ 「ここ」、イエスからいのちの糧を受ける

① 洗礼者ヨハネがヘロデによって首をはねられたことをヨハネの弟子たちがイエスに報告する(一四1-12)。イエスはその知らせを聞くと、ひとり人のいない場所に退く。イエスはヨハネが捕らえられたと聞いたときも、ガリラヤへ退いた(一四12)。マタイでは、イエスが十二人を派遣する際に、「一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい」と指示しているが(一〇23)、「退く」ことには「迫害を避ける」という目的が含まれている。イエスの先駆けとして、天の国の宣教を行っていたヨハネが逮捕されたのち、イエスがガリラヤに退いたのは、迫害を避けるためであると同時に、いよいよ自分が宣教を開始する時が来たことを知ったからである。神から委ねられた天の国の宣教が「異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民」に最初に告げられるために、イエスは退く。

② イエスはヨハネの死の知らせを聞いて退く。それは身の危険を感じたからでもあるが、神から委ねられたイエスの使命がまだ終わっていないからである。イエスはガリラヤで宣教を開始する前、ひとり「荒野」に留まった時のように、ひとり「人里離れた所」に退く。それは、あの最初の時のように、人を生かす神の言葉への信仰を確認するためである。そのイエスの後を多くの群衆がついて行く。

③ 食物のないことを心配した弟子は「ここを立ち去って、群衆が自分で食物を買うこと」を提案する。「ここ」はパン五つと魚二匹しかない場所だからである。しかし、イエスは「ここを立ち去る必要はなく、あなたがたが与えなさい」と指示する。イエスと弟子は「ここを立ち去る」か、否かで対立している。弟子は食物を供給できる場所は「ここ」ではなく、「村」だと考えている。しかしイエスは、私のいる「ここ」が食物を与える場所だと教える。

④ マタイはパンを与えるイエスの姿に「主の晩餐」のイエスを映し出している(二六26)。だから、19節後半では「魚」は消え、「パン」だけが裂かれて与えられる。また、パンが「増えた」という描写もない。パンが増えたことよりも、人の目には生きる糧を得ることはできないと思える状況の中で、人を生かすパンを与えるイエスにマタイは注目している。

⑤ マタイ福音書では、洗礼者ヨハネは天の国を宣べ伝えるイエスの仲間である。そのヨハネの死を知ったイエスは、いつか自分も弟子を残して去らねばならない時が来ることを予感する。イエスは、いつも弟子と共にいていのちの糧を与える、ということを知り、弟子に知らせるために、群衆をパンで養う。

⑥ 「人のいない場所(荒野)」は、生きるために物を自分で買うことのできない場所であるからこそ、いのちは「与えられる」ものであることを知ることのできる場となる。荒野で神がイスラエルを養ったように、イエスも群衆を「人のいない場所」で養う。マタイがこの奇跡を語るのは、「私に、ここにそれらを持って来なさい」と命じるイエスに従うとき、人は真のいのちを生かすことができることを示すためである。